

パネル発表「いのちの大切さを自覚する動物飼育活動」

吉本恒幸

「いのち」「生きる」・・・誰もがこれらの大切さを認識しているはずですが、現実には痛ましく悲しい事件が後を絶ちません。誰でもいいから人の命を奪いたいと公然と言ってはばからない凶悪犯罪。中傷内容の書き込みによるネット問題。花壇の花を無造作に荒らす破廉恥な行為。毎日のように「いのち」を軽視した出来事が続いています。

人間は弱い生きものです。だからこそ、心の中に強固で盤石な「心の砦」を築かないといけないのだと思います。本校は、本年度より文部科学省の道徳教育実践事業の指定校を受け、「自らの生命を大切にするとともに、他者の生命も尊重しながら、生命のかけがえのなさに気付き、よりよく生きていこうとする児童」を育てたいと考え実践的な研究に着手しました。

まず、道徳教育として生命尊重を重視していきます。「いのち」のもつ多様な要素、たとえば「たったひとつのいのち」「受け継がれているいのち」「支えられているいのち」などを認識させることによって「いのち」のかけがえのなさに気付かせていきたいと考えます。

また、人間はどのように生きていけば自分に満足し幸せに過ごせるのだろうかということも考えさせていきます。

ところで、「人や動物は生き返るか」と問うと、小学校高学年の約20%近くの子どもたちが「生き返る・生き返ることもある」と答えます。この傾向は重要な問題です。ゲームなどのバーチャルな世界に浸っているからという指摘もありますが、それだけでは言い切れない面があります。もっと深い認識の問題が横たわっていると思われま

す。子どもたちは人や動物の死に直面する機会が少なくなっています。このことは言い換えれば「生命あるもの」との直接的な触れ合いが乏しいとも言えます。無論、家族など身近に人はいますが、その人たちを改めて生きている存在として認識することは

あまりないでしょう。子どもたちの世界では、小動物などが生と死を理解する大切な存在です。

小学校では、どこでも飼育小屋をもち小動物を飼育しています。多くは動物好きな子どもたちによって構成される飼育委員会の子どもたちがその世話をしています。



本校では、4年生での学年飼育にしています。その理由は、動物好きであるかにかかわらず、卒業するまでに一度は飼育活動を体験させ、動物の温かなぬくもり、生命あるものが必至に生きようとしている姿などを全員に味わわせたり気付かせたりさせたいと考えるからです。いくら熱心に世話をしているても、突然、動物が死ぬこともあります。そのときに湧き上がる悲しみは、思いやりの心をはぐくむとともに、生命の有限性を知ることにもつながります。一羽のチャボの死を全校に告げることで、他の子どもたちに生命への感性を高めることもできます。

動物飼育は、いのちの教育の基盤となる活動です。学校はそのことを明確に教育課程に位置付け、子どもだけでなく保護者も巻き込んで全校的にいのちを大切にすることを確信しています。

(中野区立鷺宮小学校校長)